

あ  
く  
た

作  
サカイリユリカ

■登場人物

女

あ  
の  
と  
き  
の  
女

あ  
の  
と  
き  
の  
男

あ  
の  
と  
き  
の  
友  
人

道  
す  
が  
り

《プロローグ》

——夜の土手。まるで時間が凍結したかのよう、辺りは静まり返っている。ビニール袋とペットボトルの空き容器が乱雑に転がっている。道すがりはずっとこの場に存在として存在し続けている。

女が、ぼんやりと歩いてくる……。手にコンビニ袋。中にはペットボトルの水。もう片方の手には、手紙らしきものを持っている。

女 眠らせてくれないのね。

女、その場に力なく座り込む。傍らにコンビニ袋を投げ出すと、手紙の封を開け、目を落とす。

女 (手紙を読み始める)

「ごめんなさい。私は誰に殺されるのでもなく、私は私に殺されません。自分を守る意味守るために、私は私を殺すのでしょうか。今、幸せですか。あなたの隣、周りには誰がいますか。きつと見たことも聞いたこともない人がいるんじゃないかと思っています。

では、まだみぬ人とお幸せに」

女、手紙を読み終えると茫然としたまま手紙を破きはじめる。

あのときの女の声が聴こえてくる。

あのときの女 どんなにちぎって、ちぎってちぎってね、細かくしたって、

小さくなるだけで、なくならないのよ。

その方が何だか綺麗だけれどね

女 もうすぐ私の輪郭は消える。

水平線に太陽が溶け去っていくかのように、どこからが私だか、どこまでが私だか、そんなふうに……

女、辺りが沈んでいくのを待つ。が、女の意識ははっきりしたまま。

女

眠らせてくれないのね。消えることすらかなわない。  
そう、この身体だけはいつもいつも、私を私に縛りつける。

女、うずくまって丸まっている。

まるで自分を何かから無意識に守ろうとしているようだ。

あのときの女、登場し、女の腕を掴んで起き上がらせる。

あのときの女

なべなべ底抜け 底が抜けたら かえりましょう

両手をつないだまま、片方の手をトンネルにしてくぐり、背中合わせになる。

あのときの女

(つないだ手を揺らしながら)

なべなべ底抜け 底が抜けたら(ひっくりかえろうとして)

あつ、

女、脱力して思わずあのときの女の手を放してしまう。

女、地面に倒れ込む。※女はこれ以降、エピソードで立つまで立つことはない。

あのときの女、ゆつくりと辺りを見回しながら歩いている。

道すがり

(石を並べている)

みんなみんな死に絶えてゆきます。

ゆつくりと身体を横たへ、

五臓六腑の重みと、

それを包む皮の遥か奥まで、

血が満ちてゆくのを

ただ眺めていました。

女

誰かいらつしやるんですか。

あ・あきちゃん？ あ、か、片岡さん？ サトルくん？

あかさ、た・田代？ なつみ？

は、ま、浜野先生？ まいか？

山西さん？ら・リサ、輪島・わ、さ、な、ね、む・

みどり。みどり？みどり、みどり、みどり・

道すがり

誰かいましたか・・・？

女

え？あ、いや・私がいました。

道すがり

そうですか。

女 水

道すがり え

女 そのの、とつてもらえませんか

道すがり ああ、これ・・・

道すがり、置かれていたコンビニ袋からペットボトルの水をとりだし、  
寝そべったままの女の口元に水を流す。

女は目をつむってそれを受けている。

道すがり 水には色んなものが溶けています

溶かされて、何倍にも膨れ上がっている

女 静かな場所・・・静かで誰にも邪魔されない、私だけの、

あのときの女 口に出したら楽になれるのかな

ぜんぶぜんぶ、言っちゃったら

ここでしか吐かないから許して・・・

こんな町嫌いだよ大嫌いでも街並みも

新しいところに行つて、あたしを誰も知らないところに行つて、

全部やり直したかった

女 今も私はここで生きてる・・・

あのときの女 ちがう、本当は私を嫌いになり切りたい。

どこまでも、嫌いになり切りたいの。

女 自分ひとりの面倒みるのでせいっぱい・・・

あのときの女、下を向く。

あのときの女 足の間がちよつと冷たくて、ああなんだろう、つて思ったら血が  
流れていた、

どつと、どろりとした塊が、当たり前のように私から出た

これをおの人にを見せてやりたくなつた、ふいに、ほんの思いつき、  
だけでも。

女 自分のは自分で処理しなくちゃならない……

あの子の女、近くに転がっているペットボトルをとり、自分の足元のあたりにペットボトルの水を流しかける。

《1》

あの子の男、ハサミをもってあらわれる。

女 (気配に気づいて) あなた、あなたなんでしょう……?

耳の奥ですつと

わたしを呼んでる

夜は寒いわ。変わらないかもしれないけれど、上着、よかつたらもつていって。

いいのよ、私は平気。

あなたはまだ小ちやいから、もう1枚着こまないと。

ごめんなさいね、あなたに着せてあげられたらよかつたのに、私の手で。

あの子の女の股の間から伸びている紐を、あの子の男がゆっくりとひっぱっていく。

あの子の男 深呼吸してください

あの子の女 はい

あの子の男 大丈夫ですか

あの子の女 はい なんとか

あの子の男 痛くないですか 大丈夫です

あの子の女 ええ……

あの子の男、ひっぱった紐を手に使っていたハサミで切る。

あの子の女 あ

あの子の男 お疲れさまでした

あの子の男、水をあの子の女の股のあたりに流しかける。

女 ああ、なんにもなくなっちゃった

私 なんにもなくなっちゃった

道すがり、近づいてきてあのときの女の腹に耳をあてている。  
深い水の底にいるような時間が膨れ上がる。

あのときの女 ふーう・・・(深呼吸する)

道すがり

叩きつけられた雨粒は、白く泡だち、ぼこぼこことあとからあとから弾けて消えて、みんな、ねばねばした液だまりからうまれてくるようだ

あのときの女

私の中からいなくなつて、外側に現れたかと思つたらそれもいなくなつてしまつて、いつたいどこいつちやつたんでしょね・・・。

あのときの男、後ろを向いて、用を足している。  
ペットボトルの水を足元に流す。

あのときの男

残したくないんだ どうしたらいいかずっと考えて、  
やっぱり俺は止められなくて、止められないってことは無駄だから、不幸が一つ増えるより、いいんじゃないかって思う。

あんな男になりたくないと思つてるけど、もうどうしようもなく、  
あの男に似てしまつてる もうたくさんだ  
俺は俺の中のあの男を消す

女

彼の父は気性が荒い人だと聞きました  
それしか聞きませんでした  
とにかく名字で呼ばれるのを嫌がつていた気がします

あのときの男、自分の手の平にハサミを押し当てる。

あのときの男

馬鹿なことを考える。  
身体中の血を全部抜いてみたら、  
俺はただの俺として死ねるんじゃないかって。  
血縁。縁はいくらだって切れるけれどもね。  
この、流れているものは何だ

あのときの男、拳で床を何度も叩く。あのときの女、床の振動を身体で聴いて

いる。

女

苦しみを苦しみ抜いて、あなたはそう、  
それでも生きた。

か細い声で、微笑みながら、

どうしてか あなたの泣き顔は思い出せない。

あのときの男

喉乾いた

あのときの男、あのときの女を立ち上がらせる。空のペットボトルの口を、あのと  
きの女の胸（乳首のあたり）と、股間に当てる。それをゆつくりと飲み下すあのと  
きの男。

あのときの男

おいしい

あのときの女、ただそれを受け入れている。あのときの男、何も言わずに立ち去る。

女

ああ、なんにもなくなっちゃった

私 なんにもなくなっちゃった

女、ゆつくりと芋虫のように体を丸める。

…宝探し…

幼き日の記憶。

あのときの友人が駆けてくる。

あのときの友人

今日は何して遊ぶの？

あのときの女

タイムカプセルって知ってる？

あのときの友人

それ、なに？

あのときの女

大事なものを埋めるの

あのときの友人

大事なもののなかに、埋めちゃうの？

あのときの女

埋めても、なくならないから平気だよ。それに、ずっととって

おける

あのときの友人

・・・私は、埋められないな

あのときの女

どうして？

あのときの友人

だって、私のタカラモノは、（●●聞こえない）ちゃんだからだ

よ！

あのときの女

えっ

あのときの友人

大事な友だち。

ずっといなくならないもんね？

あのときの女

・・・うん、そうだね

あのときの友人

あんたのタカラモノは？

あのときの女

ここ

あのときの友人

え

あのときの女

この場所

あのときの友人

うーん、それも埋められないね。

じゃあ、ここに埋められるタカラモノ一緒に探そうよ！

あれは？

あのときの友人、駆けていってしまふ。

あのときの女は取り残される。

女、上半身だけ何とか起こす。

女

ねえ 覚えてる

昔一緒にドブさらいをしたね

あなたは笑って

ちよつと手を洗ってくるねって言って

遠くに行かないでほしかったのに

あなたはそのまま私が戻ってこなかったらどうする、なんて

冗談でもこわかったのを覚えてる

想像すると目の前が真っ暗になったのを覚えてる

あのときの女

(目を押さえて) 痛っ

《2》

道すがり

砂埃が舞って、花びらははためいた。

どこからかキンモクセイの香りが漂う。

黄金色の稲穂は懸命に大地に縋りつき、水を吸い上げた。

腹が膨れ上がるまで、水を吸い上げた。

..魚の死..

あのときの男が立っている。あのときの女に手の平を見せる。

あのときの男 ずいぶん簡単に死ぬんだな

あのときの女 水吸って、ぶよぶよになってる

あのときの男 ああ、

あのときの女 かたくなってるね

あのときの男 駄目だよ触っちゃ 汚いだろ

あのときの女 病気だったの

あのときの男 わからん そうだったとしても、たぶんどうにもできない

あのときの女 次はもつと長生きするのにしよう、世話は大変になるかもしれない

あのときの男 いけど、また一緒にさ、

あのときの女 どこも悪いところなんて見当たらないんだけどな

あのときの男 怪我じゃないんだから見えないだろ

あのときの女 そうよね、

二人、振り返る。

あのときの男が手のひらで作った皿に、あのときの女がペットボトルの水を注ぐ。

あのときの男はそれをそつと流す。

あのときの女 浮かんだままだね

あのときの男 そのうち流されるか、どうにかなるよ

二人、しばらく呆然と立ち尽くす。

あのときの男 あっけないな

あのときの女 え

あのときの男 いや、なんでもない

(女の方を向いて) なあ

あのときの女 え

あのときの男 赤くなってる 首ンとこ

あのときの女 あっ・・・やだわたし、まただ

あのときの女 かきむしってしまったている、ちがうちがう、触ってたいんだ、こ  
うするとすぐく落ち着く

女 魚がいなくなった。また0からのやり直し。

鳥もいなくなった。またやり直し。

猫もいなくなった。月日だけ経っていた。

もううんざり、うんざりよ

道すがり　　ここも黄金色に染まっている。

水で希釈された薬によって、数日でほろほろと枯れされて、  
みえているところだけではなく  
根っこから枯れてゆくのです

あのときの女　　わたしのからだって、こんなだったっけ

あのときの男　　(背中・腕・腹に触れながら)

ここも、ここも、ここもざらついておまけに黒っぽいよ  
でもこの手は　何の苦勞もしていない手だよ  
白くなまめかしく光ってる

あのときの女　　あなたが好きって言ってくれた手よ

あのときの男　　そんなこと言ったか

突如、母に縋りつくかのような赤ん坊の泣き声。

(あるいは男に必死にしがみつくだけな女の喘ぎ声のようにも聞こえる)

女　　静かにして、静かにして、静かに・・

あのときの友人、子供をあやしながら登場。

あのときの友人　　ごめんね　よしよし(子供を抱いている)

おしり気持ち悪かったんだよねええ　綺麗にしたからね

あのときの男　　昔のお前はもつと魅力的だった

あのときの女　　私をまだ抱くくせに

あのときの友人　　やだ　　こんなによだれ垂らして

あのときの男、ペットボトルの水をこぼすように倒れている女に注ぎ始める。

あのときの女　　あつちよつと　やだ、

あのときの男　　あのさ、

あのときの女　　なに

あのときの男　　こんなことあと何年繰り返すんだ？あと何年このままでいら  
れるだろう

あのときの女　　・・・あのね、あなたは変わらないと思う　もう

あのときの友人 赤ちゃんのかかどつてこんなにやわらかいの

あのときの男 お前を変えられたら 俺も変わるんじゃないかって思った  
でもそれ嘘だな

あのときの女 あなたのそういう弱いところ 私にそっくり 反吐が出るくらい  
あのときの男 明日のこと、明後日のこと、来月、半年後、1年、

5年、10年、そのまた先の、ずっと先、  
まだ半分にも到達していない、おそろしい時間、  
時間が待ってる、待ってるんだ、待たれてるんだ  
こんなに考えても、何も確信が持てない  
俺はなにものかになれているんだろうか

あのときの友人 はい、ほらおてて ひろげて いち、にい、さん、(指を折って  
数える)

道すがり 時間は確実に刻まれているものだ。

平行線をなぞるように辿っている。

辿っている、よりもむしろ、

滑走している。

気付いたときには

後ろを振り返ろうにも、道そのものが消えてしまっていたりする。

女 なにもものにもなれていないわよ みんな

なにもものにもなれないまま 死んでく

ねえ、もう好きにして。

どうにでもなつて、ここにわたし置いてくから。

女、ビニール袋を頭からすっぽりとかぶって、首のところで口を結ぶ。

次第に呼吸が荒くなり、体がけいれんし始める。

あのときの女、ビニール袋をやぶって女の顔を見つめる。

あのときの女 後悔してるよね？

女 どうでもいいってば

あのときの女 私をみて

女 もういいよ。お前なんか。

あのときの女 もう見ないの？

女

どっか行けよさっさと。お前みたいなクズ、のさばっててたまるかよ

あのときの女

聞いて聞いてよ ねえ

気づいて、見つめて、

私を望んで。

愛して。・・ゆるして。

女、新たなビニール袋をかぶろうとして、あのときの友人の声にさえぎられる。

《3》

あのときの友人

もういつかあって。だって楽しいことだけ話してたいじゃない？

楽しくなくなったら一緒にいる意味なくない？そうだよね？

でもまた見つければよくない？

新しい友達と仲良くして、その子が忙しくなっちゃったら別の子とまたさ、そんなもんじゃない？

あのときの女

親友ってさ、ずっと友達なんじゃないの

あんたがそう何度も確認してきたから、あたしは信じてきちゃったじゃない

道すがり

これでもかと、太陽は照りつける。

陽だまり

どんなに太陽が焦がしても

水はその輝きを増すだけだ

あのときの女

あきちゃんとの電話。片岡さんとの食事。

サトルくんとの勉強。田代とのドライブ。

なつみとの買い物。浜野先生との散策。

まいかとの旅行。山西さんとのスポーツ。

リサとのコンサート。輪島との同窓会。

かるくなりたい。もっとかるくね。

欲張り

選べないんだよ

選んでるのはあんただけじゃない

選ばれてもいるんだよ

あのときの友人

あのときの女

あのときの友人

あたしはもういいのね。だって、あたしと血の繋がってる子供がいて充分。

一緒に育ててくれる人はいたらいいし、このままいなくたってそういう生き方する。だから不安なんてないよ。

あのときの女  
あんなみたいになれば良かった

あんなの人生が欲しいよ

他人の為に生きれたらどんなにいいか

あのときの友人  
そんなこと思ってたの

でもさ、他人の為に他人のためって結局自分のためじゃない？

ていうかその人を利用して自分の現実から逃げてるだけ

あんたが大切にしているもの、ほんとはあつたくせに

あのときの女  
あたしは全部の糸の先をつかんでいたの

もう指の先にくいこんで 血が止まっちゃいそうだけど

でもそれでも離れたくないんだよ

だってみんな大切なんだから

あのときの友人  
ほんとはあんた 何も大切なんて思っていないでしょ

一番大事な自分だけあればいいんだ そうだよ

あのときの女  
こわいんだってば

そうやって可愛い自分を溺愛してやりなさいよ

あんなにはあんなの人生があるでしょ

あのときの友人、去る。

女  
ちがう、本当は私を嫌いになり切りたい。

どこまでも、嫌いになり切りたいの。

道すがり  
風上からどこかの家の団欒がにおってきます

とてもなつかしいのです・・・。

あのときの男  
もう充分だろ

それなりに楽しかったし、

逆を言うところのそれなりがあとはずっと続くだけな気がする

でも、それなりを維持するのも、割とめんどくさい。

俺は未だに夢を見る。

自分はなにもない、空っぽだって、知ってるし分かったし、

すぐにすれ違う人と自分を比べる。

その度にああ、俺、あいつには勝ってるな、とか思うわけ。

あのときの女

でもさ、そんなこと考えてる時点で結局何も変わってないよ。なんにも。むしろ悪化してないだけましか。

最初は頑張った。どうにかなると思って、でも気づいたの。あー、この岩、いくら押しても力じゃどうにもならないし、こつから動かす方法、見当たんないなあって。それで？

あのときの男

あのときの女

正直1番だと思ってたよ。1番てことはないか。どうしようもないところが、どうしようもなく好きで、でもどうしようもなくなつちやったね

あのときの男

どうせさ、俺は何もしてやれないしやつと生きてるような男だよ 選んだのはお前だろ

あのときの女

そう、あなたはすぐ言い訳して、逃げて、自分守って。1人でしか生きていけない、可哀そうな人。これ、めいっぱいの肯定駄目だって、情けないなってわかってるみたいだから。否定しないよ

あのときの男

お前さ、それ全部自分にいってんだろ

あのときの女

もうどうしたらいいのかわからない

女

本当はどうしたかったの？

あのときの男

俺が俺を嫌いなのは、父親が憎かったからだ。あいつの血を残したくないって思った。でもそれは俺の勝手だ。その代わり、少しでも、人に介入できるかなって思った。人の人生に自分を残せたらと思っただよ・・・。

道すがり

夕焼けが空からこぼれおちそうに川を染める。さつきまでジイジイ騒ぎ立っていたセミたちが、今はもう、ひっそりと静まり返っている。

あのときの男、去る。

あのときの女

もうつかれちゃった・・・

この身体、私のからだ、

このまま一生、これをひきずつて、生きていくのかと思うとゾツとする、

女

ああ、私、今まで見ようとも聞こうともしてなかった

あのときの女

(耳を塞いで) わたしもうどうでもよくて、早くむあつとしたこのくさくて病みつきになるにおいでいっばいになりたかった

(横に寝そべっていきながら)

この汚いものがいっばい溶けてる川 ひどいにおい いっしょくたになってただそれだけ そしたらきつとわたし・・・

道すがり

雨がずっと降っていてね、枝はしなって、

果実は自分の重みに耐えきれずに落下した

浸ってしまった、浸って、ふやけて、溶けてしまった

土砂降りの雨の音。

女

待って・・・!!

暗転。

仄明るい中、女、立ち尽くしている。

女

私はどこにも行つてなくて、そこにいる私は、ただ水をかいていました。

流れに身を任せたまま、泳ぐわけがなく、時折沈んで、水をがぶ飲みしました。

がぶ飲みした水は、息苦しくなって、うまく息が出来なくなったときの、すごく、生きてるなって感じたときの、あの、味がしました。

あのときの女、あおむけに横になっている。

女、駆けよつてあのときの女の口元に耳を当てる。

女

息・・・してる

あのときの女

・・・(微かな呼吸)

女

うん。もつと話して。私が言葉にしてあげるから。

あのときの女

・・・(微かな呼吸)

女

どうやって／どんな風に／だれに／どんな言葉で／  
たよつたらいいのか／わからなかった

女、あのときの女を執拗に撫でる。撫でたり、頬ずりしたりする。

女

ねえ、ずっと助けてほしかったんだね。

こわかったんでしょう？生きてゆくのが。

終わりに出来ないまま、身をやつして、悔やんで、

それでも、

みどりさん。

私大事なもの、いっぱい探し回っちゃったけど、どこにもないはずだわ。

だって私は既にあなたからもらっていたのだものね。

あのときの女

待ち、詫びていました・・・

待ちわびていました

女

もう、いいのよ

あのときの女

ありがとう

あのとこの女、微笑んでそつと目を閉じる。

女 私の選択……

《エピローグ》

女 (自らの身体をさすって) ああ、かゆい。血が戻ってきた。

(つぶやくように) そういえば、あれ食べたかった、あそこにも行ってみたかった、

まだ欲しいものあった、やり足りなかった、

あのひと、あのひと、あのひとは元気にいるだろうか

さびしがつてないだろうか

こわがつてないだろうか

道すがり

遠くの野山からそつと溶け出した湧き水は

静かに山肌を流れだし、やがて合流し、陽のきらめきを

その身に移して、踊るように麓へとくだってゆく。

命から命を奪うのではなく、

命から命を伝って、小さな芽を出す

“ みどり ”

道すがり、ペットボトルの水を床にこぼしながら、地面に文字を書く。

女 (胸に手を当てている)

道すがり

(女の手を取り) ほら、私をさわってみてください。

私を見つめてください。私を聴いてください。

私を味わってください。私を嗅いでください。

私を感じてみてください。

二人の間に穏やかな時間が流れていく。

女 あっ、(と頬に手を当てる)

道すがり 雪が降ってきましたね

女 え？

道すがり よく見てごらんなさい。

道すがり、女にゆつくりと背を向け、倒れているあのときの女の上に折り重なるように覆いかぶさる。

女

そこにはきらめきがあった。

誰も触れたことのない、無数の光が、

少しばかり眩しい。

・・・ねえ、あなたもこの景色を見たことがありましたか？

陽光に導かれるかのように、自分の存在の、肉の重みを、感じてゆつくりと立ち上がる女。初めて呼吸するかのように、空気に口づける。

——— 終幕